

Title	副詞に接続するガ・ケレドモの用法
Author(s)	齊藤, 美穂
Citation	阪大日本語研究. 2009, 21, p. 61-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7509
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

副詞に接続するガ・ケレドモの用法

The use of 'ga' and 'keredomo' connected to an adverb

齊藤 美穂

SAITO Miho

キーワード：ガ・ケレドモ、副詞、出来事の成立量・完全性の程度の大小、肯定・否定

要旨

本稿では、副詞にガ・ケレドモが接続し、修飾語相当の部分となっている例を対象に分析を行った。そして、現れる副詞が、出来事の成立量や完全性の程度が小さいことを示すものである場合には肯定形式で、大きいことを示すものである場合には否定形式で現れることを指摘した。このような形でガ・ケレドモが用いられるのは、話し手の中に、量や程度の側面に対する否定的な評価と、文に述べられる出来事の成立そのものを認めるという肯定的な態度の対立がある場合に限られる。これは、ガ・ケレドモがいわゆる「逆接」関係を示すものであったためと考えられるが、修飾語に接続する場合には、複文の従属節の述語に接続する場合には見られない、意味・文法的な制約が生じている。

1. はじめに

現代日本語の接続助辞ガ・ケレドモ（「けれど／けども／けど」などの異形態をも一括してこのように示す¹⁾）については、既に多くの論考が存在する。

両形式は「逆接」を表す接続形式の代表的なものとしてされる一方で、他の形式に比べ、多様な意味・機能があることが指摘されている。例えば森田（1980）では、「逆接」「対比」「並列・累加」「前置き」といったものがあるとされている。

また、南（1991, 1993）では、各種の複文の「従属句」（従属節）について、その「構成要素」（述語的部分以外の成分と、述語的部分の要素）を調査し、ガ・ケレドモによって構成されるものを、最も多様な「構成要素」が現れうるC類に分類している。ガ・ケレドモによる「従属句」の述語部分には、過去を表す形式や、推量を表す形式も現れ、他の「逆接」を表す接続形式を用いた場合に比べ、文法的な制約が少ないことが認められている。

ただし、それは、ガ・ケレドモが、「複文」を構成している場合に限られる。例えば、ガ・ケレドモには、「明日の会議だけど、延期できないかな」という文に見られるような、「談話主題の提示」（小出1984など）などと称される機能がある²⁾。しかし、この場合には、ガ・

ケレドモが接続するのは文（従属節）ではなく、指示的な名詞句であり、ともなう助辞「だ・です」は、非過去・断定の形に制約される（齊藤2007a参照）。

ガ・ケレドモの用いられる例には、さらに、1) のような例が見られる。

1) この国は、ゆっくりとだが変化している。

1') この国は、ゆっくりと変化している。

ここではガが、副詞「ゆっくりと」に「だ」を介して接続しており、この「ゆっくりとだが」は全体で、(連用)修飾語相当の部分となっている。1') のように、ガの介在しない形で言い換えた場合と比べても、「ゆっくりと」と「変化している」との間の意味関係に変わりはなく、これが単文の一部（ここでは修飾語相当の部分）であることがわかる。

しかし、「ゆっくりと」と対義関係にある「急速に」は、2) に示すように、ガが接続した「急速にだが」という形では修飾語になりにくい。同じ文の中でも、2') のように、ガが介在しない副詞単独の形であれば修飾語になれるという点では1) と同じなのであるが、この、1) と2) の間にある、許容度の違いは何であろうか。

2) ? この国は、急速にだが変化している。

2') この国は、急速に変化している。

ガ・ケレドモが接続するのが、「従属節の述語」である場合には（この場合、「副詞」と呼べるかどうかが問題となるが）、次の3)、4) のように、それぞれ置かれる文脈は異なるものの、対義関係にあるいずれの語も、不自然とはならない。

3) この国の発達はゆっくりだったが、隣国は急速に変化していった。

4) この国の発達は急速だったが、隣国はゆっくりと変化していった。

先行研究では、1) のような例についてとりたてて扱われていない。これは、この種の例の出現頻度の低さもあるが（3節参照）、ひとつには、これが「逆接」や「対比」といった意味関係を表すものの延長でとらえられているためだと考えられる³⁾。しかし、2) で示したようにこの種の例には、ガ・ケレドモが「従属節の述語」に接続する3)、4) のような場合には見られない制約が生じている。

本稿では、1) のように、副詞（及びそれに準ずるもの）にガ・ケレドモが接続し、全体で修飾語相当の部分となっているものについて実例をもとに分析し、その意味・文法的な制約を明らかにすることを目指す。

以下、2節では本研究における研究方法を示し、3節で分析結果を述べる。そして、そ

の結果とガ・ケレドモとの関係について、4節で考察を行う。最後に、5節で本稿の内容をまとめる。

2. 分析にあたって

本節では、分析の対象を確認し、調査資料及び分析方法を示す。

2.1. 分析の対象

まず、先行研究における副詞の規定を確認しておきたい。鈴木(1972)では、副詞を次のように規定している。

副詞は動詞のしめす動きや状態の質・ようす、量・程度、および形容詞のしめす性質や状態の程度をあらわして、文のなかで修飾語(少数は状況語)としてはたらく品詞である。(鈴木1972:p.462)

副詞の文法的な特徴としては、ほかに以下のことが挙げられている。

- ①一部、とりたてのカテゴリーをもつものもあるが、それ以外に語形変化がない。
- ②部分的に連用的なかざり(程度副詞)をうける。
- ③連用的なかざりとなる。

副詞には、「の」をともなって規定語になるものや、コンピュータ(むすびのくつつき)の「だ」「です」をともなって述語になるものもあるが、これらのものについて副詞の形とみとめるかどうかは検討を要するとされている(pp.462-463参照)。基本的には①のように、(一部)とりたてのカテゴリーをもつものを除き、語形変化はしない、とみなすのが適当であろう。

なお、鈴木(1972)では、修飾語や状況語として機能する、第一形容詞の「一く」や、第二形容詞の「一に」の形についても、副詞と認めている⁴⁾。それは、これらの形が動詞(形容詞)をかざり、それらがさししめす「属性の属性(ようすや程度など)」をさししめすのに対し、形容詞の他の形は、名詞のさししめす「対象の属性(性質や状態)」をさし、文中では規定語や述語としてはたらくという点で、質的に異なるためであるとされる(p.463参照)。

他の先行研究では、「一く」「一に」のような形は、「形容詞の連用形」とされ、副詞とは扱われないことが多い。例えば、工藤(2000)では、「きれいに忘れる」のような、もとの形容詞との間で意味が大きく変化しているものを除いて、「形容詞・形容動詞の「連用形副詞法」とみなされている。しかし、この意味の変化については程度差も考えられ、

どこからを副詞と認めるかは、研究者によって見解が異なることが予想される。

このように、「副詞」の規定には、研究者による違いがある。本稿では、そのことをふまえたうえで、基本的に鈴木（1972）の規定に従い、修飾語相当の部分としてはたらく、上記のようなものを「副詞」と認め⁵⁾、該当する語（語形）にガ・ケレドモが接続したものを分析の対象とし、実例を収集していく。

なお、副詞にガ・ケレドモが接続する場合、助辞「だ（です）」を介することになるのだが、ガ・ケレドモの例を見ていると、5)のような例が現れる。（用例末尾の括弧内に、用例の出典の略称とページ数を示す。新聞データの場合には、掲載年月日と紙面の種類を示す。出典の詳細については稿末の一覧を参照されたい。なお、末尾に出典の示されていないものは、特に断りのない限り、筆者による作例である。下線は筆者によるものである。）

- 5)（※筆者注：ガスボンベを指して）「ノズルがゆるんでいる。ごくわずかだがリークしているから、この臭いをコンビナートからのガスだと勘違いしたんだな」（生命142）

この、第二形容詞の語幹（「わずか」）に直接「だ（です）」がつくのは、本来は述語になるときの形であるが、ここでの「ごくわずかだが」は全体で、下の5)のような、「-」の形をとる場合と同様に、あとの動詞述語の修飾語相当の部分になっていると考えられる。

- 5)（ガスが）ごくわずかにリークしている。

副詞には、形容詞の連用形以外にも、名詞の格の形や動詞の中止形など、他品詞から転成してきたものが多くある。ガ・ケレドモが接続する場合、5)のように、通常副詞とみなされるものとは異なる形で現れつつ、ガ・ケレドモを含めた全体としては、修飾語相当の部分となっていることがある。本稿では、5)のような例についても、修飾語相当の部分であることを重視し、副詞に準ずるものとみなして、分析の対象とする。

以下、副詞（及びそれに準ずるもの）に、「だ・です」を介してガ・ケレドモが接続した部分を、「Xダガ」と言及することがある。ここでの「ダ」は、丁寧さによるものも含めた変化形を代表させたものであり、「ガ」はガ・ケレドモを代表させたものである。

2.2. 対象とする資料

本研究では、現代日本語で書かれた小説⁶⁾ 50冊から、2.1.に示した基準にもとづき、該当する用例を収集した。出現した用例数が少なかったため、毎日新聞1年分（2006年版）

のデータからも用例を収集した。

なお、小説には会話文と地の文という、異なるテキストタイプが含まれ、また、新聞の中には、インタビュー記事や投書欄などもあり、さまざまな文体が登場するが、ガ・ケレドモの意味・機能上、特に違いが見られない限り、テキストタイプや文体の違いについては言及しない。

2.3. 分析の観点

齊藤（2007b）では、数量を表す語句にガ・ケレドモが接続した例を扱い、次のような点を指摘している。（数量を表す語句の中には量を表す副詞が含まれており、本稿で扱う対象と重複している部分がある。）

①少量を表す語句に接続する例が多く見られ、この場合、肯定形式で現れる。

例) 少しでも、わずかだが、短い期間ではあったが、一瞬だが、たまにだが、ごく稀ではあるが、たったの一種類ではあったが、ほんの数行だが…

②多量を表す語句に接続する例は相対的に少なく、否定形式で現れる。

例) 頻繁ではないけれど、全部ではないが、毎日ではありませんが…

6) 改めて鏡で見ると、ズボンにも少しだが血がついていた。(寝台111)

7) 全部ではないが、慎の言うことはある事実に触れていると、咏子は認めざるを得ない。(砂の384)

この点をふまえ、本稿では、次のような点に注目して分析を試みる。

- ・対義関係にある副詞の対
- ・「だ・です」のとり形式（肯定形式か、否定形式か）

なお、通常、副詞単独の場合、否定形式をとって修飾語となることはない（*「少しでもなく食べた」）。この点を考慮すると、「Xダガ」が否定形式をとるものについて、「修飾語」相当とみなすことには違和感があるかもしれない。しかしながら、肯定形式であれ否定形式であれ、構文的に見て、当該部分に対応する主語を持った述語であるとは認められず、「従属節の述語」となっているとも言いがたい。文中で「Xダガ」の果たす機能を考えれば、やはりこれ全体で、修飾語相当の部分になっているとみなせる。

また、「Xダガ」には、否定形式以外に、丁寧さによる変化形が現れることや、助辞「は」によってとりたてられることがあり、述語らしさを感じられる。これは、もともとガ・ケレドモが従属節の述語につき、複文を構成する接続助辞であることと関係していると考え

られる。しかし、修飾語相当の部分として機能する「Xダガ」の場合、後述するように、その出現形式が、基本的に副詞の意味的なタイプによって肯定形式か否定形式のいずれかに制約される。この意味で、典型的な従属節の述語とは異なっていると考えられる。

3. 分析結果

2節で示した方法で分析を行った結果を、以下に述べる。

3.1. 出現頻度について

まず、「Xダガ」の例について、出現頻度の面からその特徴を記しておく。

現代日本語で書かれた小説40冊分（今回用例の収集対象とした50冊のうち、ガ・ケレドモの用例全体の調査を行った冊数）から得られた、接続助辞ガ・ケレドモの全用例数は、13,003例である。しかし、このうち、2節で確認した規定に該当する「Xダガ」の例は、わずか40例であった（この数には、数量名詞の用例数は含まれていない）。新聞のデータからは58例で、合計98例である。この出現頻度の少なさは、ガ・ケレドモがもともと接続助辞であり、先行する従属節の述語に接続するのが本来的な働きであるのに対し、副詞は専ら文中で修飾語となる語であることを考えれば、当然のこととも言える。

少ない用例数で行った分析であるため、今後の検証が必要であるが、ここでは類似した用法を持つ他の品詞（数量名詞など）の例も助けとし、分析を試みたい。

3.2. 副詞のタイプと出現形式

収集した用例を、2.3.に示したように、次の点に注目して分析を行った。

- ①対義関係にある副詞の対
- ②「だ・です」のとり形式（肯定形式か、否定形式か）

3.2.1. 現れる副詞の対

収集した全ての例について、対義関係となる対の例が得られたわけではないが、次のような対が複数見られた（ただし、対義関係にある語は必ずしも一対一の対をなすわけではない）。少量と多量のような、意味的に対義関係にある語の集合をまとめる、「量」のような概念を、各対について〈 〉に入れて示す（この名称は暫定的なものである）。以下、この概念を「カテゴリー」と称しておく。

・「少し」－「十分」 …〈量・程度〉を表すもの

- ・「たまに」－「頻繁に」 …＜頻度＞を表すもの
- ・「間接的に」－「直接に」 …＜直接性＞を表すもの
- ・「偶然」－「計画的に」 …＜意図性＞を表すもの

3.2.2. 出現形式

2.3. で、数量を表す語句に接続する例では、少量を表す語句の場合は肯定形式で、多量を表す語句の場合には否定形式で現れることにふれた。(＜頻度＞についても、頻度の高低を、多量・少量と読み替えることが可能である。) 今回収集した例においても、同様の肯定・否定形式との対応が確認できた。

＜量・程度＞＜頻度＞以外についても、対義関係にあるものは、一方が肯定形式、他方が否定形式で現れる傾向が見られる。上で＜直接性＞を表すとした対では、間接的なほうが肯定形式、直接的なほうが否定形式で現れる。また、＜意図性＞を表すとしたものは、非意図的であることを表すものが肯定形式で、意図的であることを表すものが否定形式で現れる。また、対となる例は見られなかったが、「漠然と」「ぼんやりと」のような不明瞭さを表す例が複数見られ、これはいずれも肯定形式で現れていた。ここから、「はっきりと」のような、明瞭さを表す語であれば、否定形式で現れることが予想される。この対をまとめる概念を＜明瞭さ＞と称しておく。

このように、対の一方の例しか得られなかったものについては内省で他方について補い、今回収集できた主なものをまとめると、表1のようになる。

表1において、「A」「B」として横に配列してあるのは、互いに対義関係にある副詞で、Aは基本的に肯定形式で現れるタイプ、Bは否定形式で現れるタイプである。

表1では、肯定形式は「－だが」、否定形式は「－ではないが」で代表させて示している。また、上記①②の対応関係を考察するために、それぞれの副詞について肯定・否定形式の場合を記しており、このうち、実例も得られず、内省でも不適切だと思われる形式については、「？」を付して示している。また、今回実例では得られなかったものの内省で適切であると思われる形式については、括弧に括って示す。なお、「－に」「－と」のような形をとる副詞については、ガ・ケレドモが接続する場合、「－ダガ」のような形で現れることもある(例:「ゆっくりだが」)。

表 1：副詞のタイプと出現形式の対応

タイプ カテゴリー		A	B
量・程度	肯定	少しだが 一部／局部的にだが	?すべて／全部だが ?十分だが
	否定	?少しではないが ?一部／局部的にではないが	すべて／全部ではないが 十分ではないが
頻度	肯定	たまにだが 時々だが	?頻繁にだが ?いつも ⁷⁾ ／毎日だが
	否定	?たまにではないが ?時々ではないが	頻繁にではないが いつも／毎日ではないが
進展の速さ	肯定	徐々にだが ゆっくりとだが	?急速にだが ?すぐだが
	否定	?徐々にではないが ?ゆっくりとではないが	(急速にではないが) すぐではないが
明瞭さ	肯定	漠然とだが ぼんやりとだが	?はっきりとだが
	否定	?漠然とではないが ?ぼんやりとではないが	(はっきりとではないが)
直接性	肯定	間接的にだが 遠回しにだが	?直接にだが
	否定	?間接的ではないが ?遠回しにではないが	直接にではないが
意図性	肯定	偶然だが ⁸⁾ たまたまだが	?計画的にだが ?積極的にだが
	否定	?偶然ではないが ?たまたまではないが	計画的にではないが 積極的にではないが

3. 2. 3. 各タイプに見られる意味的特徴

ここで、表1で分類した2つのタイプ(A,B)について、その意味的特徴を考えてみたい。
 <量・程度><頻度>のカテゴリーについて言えば、Aは少量、Bは多量を表すタイプである。その他のカテゴリーについては、どのように考えればいいであろうか。

仁田(2002)では、いわゆる「様態を表す副詞」の中心的なものとして、「動き様態を表す副詞」という下位分類を設け、これを、「動詞の表す動きそのものの展開過程の局面に内属する諸側面を取り上げ、そのありようを差し出したもの」(p.84)であるとしている。その「諸側面」としては、連続性・複合性をもつものが少なくないことを認めたくえて、大きく、<動きの勢い・強さ>、<動きの早さ>、<動きの質・様>という3つがあるとし、

このうち、より一般性が高いとされる〈動きの勢い・強さ〉には、「力学的なエネルギーの多寡が目に見える形で現れているもの」だけでなく、「動き遂行の完全性や動き実現の深度・程度性といったもの、さらに量性や回数性に関連するもの」も、「基本的にエネルギー量に関わるもの」として含まれるとされる(p.85参照)。つまり、ここでの〈動きの勢い・強さ〉とは、広く動きの「エネルギー量」に関わるものとみなされているのである。これは、文に述べられる出来事の成立量や完全性の程度と考えることができる。

このように考えると、表1の〈量・程度〉〈頻度〉のカテゴリーと同様に、他のカテゴリーもとらえることができそうである。本稿で〈進展の速さ〉としたものでは、「急速に」のように速いことを表すものは、一定の時間内における出来事の成立量が大きいこと（完全性の程度が大きいこと）を、「ゆっくりと」のように遅いことを表すものは成立量が小さいこと（完全性の程度が小さいこと）を表していると考えられる。また、表1の〈明瞭さ〉〈直接性〉のカテゴリーに属するものでは、それぞれのカテゴリーにおいて、より明瞭であること、より直接的であることを表すものが、出来事の成立量や完全性の程度が大きいものと考えられる。〈意図性〉に属するものについては、現時点では十分な説明が与えられないが、出来事の成立が動作主の意図に則ったものであるもののほうが、その完全性が認められやすいのではないか。一方、非意図的に成立した出来事に対しては、動作主による成立への関与が小さいものと考えられ、その意味で、完全性の程度も相対的に小さいものと考えられる。

このように考えると、表1でタイプBとなったグループは基本的に、各カテゴリーにおいて、出来事の成立量や完全性の程度が大きいものと考えられる。逆に、タイプAはその成立量や完全性の程度が小さいものとしてまとめられる。

3.2.4. カテゴリー別の副詞と出現形式の対応関係

以下では表1に挙げた各カテゴリーについて、3.2.3.で述べた副詞の意味的特徴と出現形式の対応関係を、具体例を挙げながら確認していく。

3.2.4.1. 量・程度を表すもの

量や程度の小ささを表すものが肯定形式で現れる。特に「(ほんの)少し」の例が多く見られる。「一瞬」「一部」「局部的に」「わずか(に)」などもこのグループに入る。逆に、量・程度が十分であることや、全てであることを示すものは、否定形式で現れる。

8)「嘘だな。僕は、ほんの少しだが、写真の世界を覗いたけど、君みたいな美人の

女性カメラマンを見たことはないよ」(寝台20)

- 9) 土地や株は、局部的にだがすでにバブル状態になっている。(毎日 2006/03/29 朝刊 特集)
- 10) 全部ではないが、慎の言うことはある事実に触れていると、咏子は認めざるを得ない。そのためますます苛立ちがつのるのであった。(砂の384)
- 11) (前略) しかし、事故当日に見舞いに行ったことなどを挙げ、「十分とはいえないが反省している」と情状酌量した。(後略) (毎日 2006/03/26 夕刊 1面)

3. 2. 4. 2. 頻度を表すもの

「たまに」「まれに」のような、頻度の低さ(回数量の小ささ)を表すものが、肯定形式で現れる。一方、頻度の高さを表す「いつも」「毎日」「頻繁に」などは否定形式で現れる。

- 12) JBによれば、ごくたまにだけれど、わたしはチェロに夢中になるあまり、自分の弾いている曲に合わせてメロディを口ずさむことがあるそう。(後略) (青の97)
- 13) (前略) 小笹の茂るその道を捜してまわると、ごく稀ではあったが、空の薬莢を捨うことができた。(後略) (母の93)
- 14) ガリレオ以来というべきか、科学はいつも思想と感情の敵だった。科学的であることを掲げた思想も、結局は敵だった。いつもではないが、ジャーナリズムも似ていて、しばしば科学よりは感情の方に味方する。(後略) (毎日 2006/03/05 朝刊 読書)
- 15) 「それに論文が出来上がっても、なかなか読んでくれないとか、いろいろクレームをつけるとか……」／「そういうことが実際にあるんですか」／「そう頻繁にというわけではありませんが、稀には(※筆者注「あります」)」(脳は259)

3. 2. 4. 3. 進展の速さを表すもの

「徐々に」「少しずつ」「ゆっくりと」などの、動きや変化の進み方が遅いことを表すものが肯定形式で現れる。これらは、一定時間内における出来事の成立量が小さいことを表す。逆に、今回実例は得られなかったが、1節で挙げた「急速に」のように、高速度であることを表すものは、否定形式で現れると予想される。なお、出来事の成立時期の早さに言及する「すぐ」は、否定形式で現れた。

- 16) (前略) 昨年末のW杯第8戦で今季自己最高の16位となり、第9戦は26位。徐々

にはあるが、状態は良くなってきた。(毎日 2006/01/06 夕刊 スポーツ)

- 17) 中東の国々は、ゆっくりとではあるが、民意の反映された国家づくりへと歩き出している。(毎日 2006/02/07 夕刊 総合)
- 18) この国は、急速にはないが、変化している。
- 19) 与党・東ティモール独立革命戦線（フレティリン）との関係について「すぐではないが、私自身がメンバーになるのも選択肢の一つだ」と語り、87年の脱退以来の復党の可能性を示唆した。(毎日 2006/07/12 朝刊 国際)

3.2.4.4. 明瞭さを表すもの

知覚あるいは認識内容の明瞭さの度合いが小さい、つまり不明瞭であることを表す「漠然と」「ぼんやりと」などが肯定形式で現れる。これらは出来事の完全性の程度が小さいものと言える。今回、事例は得られなかったが、明瞭さを表す「はっきりと」や「くっきりと」などであれば、否定形式で現れるであろう。

- 20) 漠然とではあるが、取り返しのつかない思いが湧き上がった。過ぎ去った年月への思いで、美也子の胸は急激に泡立った。(砂の203)
- 21) リカコが生まれたころのことをぼんやりとだが覚えている。突然現れた赤ん坊は古びたベビーベッドに寝かされて、黒目を小刻みに動かしていた。(後略) (夜か35)
- 22) リカコが生まれたころのことを、はっきりとではないが、覚えている。
- 23) くっきりとではないが、防犯カメラに犯人の姿が写っている。

3.2.4.5. 直接性を表すもの

「間接的に」「遠回しに」など、出来事の実現のあり方が間接的であることを示すものが肯定形式で現れる。これらは出来事の完全性の程度が小さいものと言える。逆に、その完全性の程度の大きいことを表すと考えられる「直接に」は否定形式で現れる。

- 24) 基本的には、認知機能そのものは改善することは困難ですが、認知症の行動心理症状の改善が観察され、認知機能の維持ができることにより、間接的ではありますが、認知症の進行を遅延できるかどうかが大きな課題となります。(毎日 2006/12/17 朝刊 特集)
- 25) 午後9時40分、会談を終えた谷内は「良好な雰囲気の中で話し合った」と記者団に説明。「直接ではないが(安倍に)簡単に報告した」と語った。(毎日

2006/09/24 朝刊 2面)

3.2.4.6. 意図性を表すもの

「偶然」のような、動きに対する動作主の意図性が低い（極端な場合には、ない）ことを表すものが肯定形式で現れる。「ふっと」も意図性の低いものとみなせるであろう。これらは出来事成立の完全性の程度が小さいと考えられる。一方、意図性の高さを表す「計画的に」「積極的に」などは、否定形式で現れる。

- 26) 「(前略) まったく偶然なのだけど、芙美子は千倉に別宅を作ろうとしている。(後略)」(最愛237)
- 27) 「あれほど強いことを言っておきながら、笑われるかもしれないけれど荒武を殺せなかったことも、今、こうして穏やかな時間の流れの中に生きてるとね、ふとね、本当にふっとだけけれど、どこかに情のような濁りが湧いていたのかもしれない。(後略)」ニュー 333)
- 28) 「本当にのぞいたんですか」／「え？まあ、計画的にじゃないが、たまたま庭を散歩してたらあの人が着替えてるところが見えたんでね」(青春93)
- 29) さらに「娘は世界に一人しかいない、かけがえのない『木下あいら』。積極的にではないが、名前や写真が犯罪の抑止につながるのなら、出ても構わない」と実名報道を容認した。(毎日 2006/07/09 朝刊 総合)

3.3. 本節のまとめ

「Xダガ」の形で現れる副詞のタイプと出現形式に注目して分析した結果、肯定形式で現れるのは、文に述べられる出来事の成立量や完全性の程度が小さいことを表す副詞であり、否定形式で現れるのは、その成立量や完全性の程度が大きいことを表すものであった⁹⁾。つまり、「Xダガ」全体としては、出来事の成立量や完全性の程度が小さいか、少なくとも不十分・不完全であることを示すということになる。1節で「急速に」の例を挙げて確認したように、副詞単独の場合には、出来事の成立量や完全性の程度の大きいことを表すものが、ガ・ケレドモが接続する場合には否定形式で現れ、全体として不十分・不完全であることを表すようになるのである。これには、ガ・ケレドモがもつ意味・機能と、修飾語相当の部分に接続するという条件が関わっていると思われる。

4. ガ・ケレドモの意味・機能

今回対象とした用例では、ガ・ケレドモは修飾語に相当する部分に用いられ、両形式は本来の文と文（節と節）をつなぐ接続助辞としての機能は果たしていない。特に肯定形式の場合には、ガ・ケレドモが介在しなくても文は成立する。その意味では、とりたて助辞と似ているのだが、ここでのガ・ケレドモの働きはどのようなものであろうか。本節では、3節で見た、副詞のタイプと肯定形式の対応関係から、この点について考察する。

4.1. 出来事の側面に対する否定的な評価

程度副詞は、一般に否定形式と用いられることがないことが工藤（1983）において指摘されているが、量を表す副詞や様態を表す副詞自体は、否定文で用いられることがある。しかし、今回扱った、副詞にガ・ケレドモの接続した「Xダガ」は、肯定形式の平叙文中で用いられていた¹⁰⁾。副詞が「Xダガ」の形で現れるのは、文に述べられる出来事の成立を話し手が基本的に認めている場合なのである。

ただし、修飾語で表される量や程度、様子といった側面において、その成立を認めるのには不十分なところを認めている。話し手の中にあるこの対立的な2つの態度を反映して、ガ・ケレドモは用いられているのではないか。

副詞単独の例と比べて、ガ・ケレドモが接続した場合には、量や程度といった副詞の表す側面を、話し手が否定的にとらえていることがより明確に感じられる。次の例では、「徐々に」単独の場合には、単に変化の進展の速さについて詳しく表しているのとれるが、「徐々にだが」になると、この速さに対し、話し手が否定的な評価を加えていることが感じられる。このことは、それ自体は量の大小を直接表現するものではない数量名詞の場合に、より明確になる。

30) この国は $\left\{ \begin{array}{l} \text{徐々に} \\ \text{徐々にだが} \end{array} \right\}$ 変化している。

31) 来月 $\left\{ \begin{array}{l} \text{1週間} \\ \text{1週間だけど} \end{array} \right\}$ 休暇をとる。

上に述べたような、対立的な態度がない場合には、ガ・ケレドモは用いられない。これは、ガ・ケレドモが本来、いわゆる「逆接」関係を表すのに用いられる接続助辞であるためと考えられる。「*たくさんだが / *少しじゃないが お酒を飲んだ。」「*はっきりとだが / *ぼんやりとじゃないが 覚えている。」のような例が見られないのはこのためであろう。

4. 2. 出来事の成立への肯定的な態度

一方で、ガ・ケレドモの使用により、出来事の成立そのものに対する話し手の肯定的なとらえ方も、対照的に示されることになり、文全体としては、ガ・ケレドモがない場合に比べ、出来事の成立をより積極的に肯定し、さしだす文となると考えられる。

例えば、用例32) 33) では、それぞれ不十分な点は認めつつ、「お金を払う」「覚えている」という出来事の成立は肯定されており、それを前提として成り立つことがら（それぞれ「酒代に化ける」、記憶の内容。点線を付して示す）が後に述べられている。

32) 「いまのままがいいです。友人には毎日少しだけど金を払うことにしました。二人の酒代に化けてしまいそうだけど」(霧の250)

33) リカコが生まれたころのことをほんやりとだが覚えている。突然現れた赤ん坊は古びたベビーベッドに寝かされて、黒目を小刻みに動かしていた。しょうゆの染みこんだ目玉焼きみたいなその黒目の、不安定でせわしなげな動きを、父と母に囲まれて私は見ていた。(後略)(夜か35)

文脈面からの考察はまだ不十分であるが、ガ・ケレドモは、何らかの否定的な側面があることを認めながらも、出来事の成立そのものは積極的に認めようとする際に用いられると考えられる。このことは、「しか」によるとりたての例と比較することでも、窺える。同じ質問に対する答えでも、「Xダガ」であれば肯定の、「Xシカ」であれば否定の応答（それぞれ「うん」「いや」）とともに用いられるのが自然であろう。

34) A: 子どものころのこと、覚えてる?

B: { うん、ほんやりとだけど、覚えてるよ。
 いや、ほんやりとしか、覚えてない。

修飾語となる副詞に接続しているガ・ケレドモは、複文を構成する機能は果たしていないが、本来持っていた、対立的な意味関係にある2つのことがらを結びつけるというはたらきが、現れる副詞やその出現形式に影響を与えていると考えられる。

5. まとめ

本稿では、副詞（及びそれに準ずるもの）にガ・ケレドモが接続し、文中で修飾語相当の部分となる例を対象に、対義関係にある対、及び肯否形式に注目して分析を行った。

その結果、肯定形式で現れるのは、文に述べられる出来事の成立量や完全性の程度が小

さいことを表すもの、否定形式で現れるのは、その成立量や程度が大きいことを表すもので、「Xダガ」全体としては、成立量や完全性の程度が不十分・不完全であることを表すものになることを確認した（3節）。このような語の意味に応じた文法的形式の制約は、ガ・ケレドモが従属節の述語に接続する場合には見られないものである。

そして、3節で示した対応関係と、「Xダガ」が用いられるのが基本的に肯定の平叙文であることから、ここでのガ・ケレドモの意味・機能について考察し、副詞によって表される、出来事の何らかの側面に対して否定的な評価を与えつつ、出来事の成立そのものは肯定的に述べるという、話し手の対立する2つの態度を表すのに用いられていると指摘した（4節）。

今回集められた用例は少なく、そこから一般化を試みるのは難しいが、仁田（2002）から示唆されるように、副詞の示す、出来事の成立量や完全性の程度に注目することで、様態を表すのが一義的な副詞であっても、その出現形式がある程度予想できる¹¹⁾。出来事の成立量や完全性の程度が小さいことを表すもの(A)と、大きいことを表すもの(B)に分け、例を挙げると、次のようになる。

A. 小さいことを表す（含む）もの ⇒ 肯定形式で現れる

少しだが（量）／たまにだが（頻度）／徐々にだが（速さ）／
 ほんやりとだが（明瞭さ）／間接的にだが（直接性）／
 ポツポツとだが（様態+量）／ちびちびとだが（様態+量）／
 たどたどしくだが（様態+速さ）／よろよろとだが（様態+速さ）／
 たまたまだが（意図性）／しぶしぶとだが（意図性）…

B. 大きいことを表す（含む）もの ⇒ 否定形式で現れる

十分ではないが（量）／頻繁にではないが（頻度）／急速にではないが（速さ）
 ／はっきりとではないが（明瞭さ）／直接ではないが（直接性）／
 ザーザーとではないが（様態+量）／がぶがぶとではないが（様態+量）／
 すらすらとではないが（様態+速さ）／すたすたとではないが（様態+速さ）
 ／わざとではないが（意図性）／喜んでではないが（意図性）…

ただし、副詞の中でも、「Xダガ」の形では修飾語として現れない（現れにくい）ものがあるようである。例えば、「初めて」などは、「ここに来たのは初めてだが、…」のような、従属節の述語の位置に現れる用例は複数見られたが、修飾語相当部分になっているものは見られなかった。このような傾向の見られるものについての分析は、まだ行えていない。

今後の課題である¹²⁾。

今後、今回行ったようなガ・ケレドモのもつ個別の意味・機能の分析結果をもとに、両形式のもつ意味・機能を総合的に示すことを目指したい。

注

1) ガには、ケレドモにはない逆条件節をつくる機能があるが、この種の例はひとまず考察の対象から外し、本稿ではガ・ケレドモを基本的に同じ意味・機能をもった助辞として扱う。以下、本文中では、「ガ」とのみ記すこともある。

・「(前略)しかし、そのあと、私がどこへ行こうが私の自由です」(ドナ186)

2) この「主題提示」のような機能があることを認めている先行研究は多いが、この意味・機能の変化によって生じる文法的な制約について詳細に分析しているものは、「主題提示」の場合に絞って分析を行った高橋(1999)など一部のものを除き、ほとんど見られない。

3) 文中での位置や機能の点から考えると、この種の例は、「夜分遅くおそれいりますが…」のような「注釈」(才田・小松・小出1984)などとされる例とも異なると思われる。

4) この形の形容詞をすべて副詞と認めているわけではなく、動詞の示す動きのようすや程度などを表し、動詞を限定するものに限っている。下のように、動詞とくみあわさって全体で合成述語となるようなものについては、形容詞としたほうがよいとしている。

・……を 残念に おもう / ……を こいしく おもう

5) 陳述副詞にガ・ケレドモが接続する例は、独立語となるため、今回は考察の対象から外した。(注12も参照されたい。)また、「突然」や「早速」のような副詞は、ガ・ケレドモが接続した場合、状況語または独立語となるため、対象外とした。

6) 現代日本語で書かれたものを対象とする。なお、「現代日本語」をどうとらえるかは難しい問題であり、筆者にはここで十分な議論を行うことはできない。本研究では、便宜的に、第二次世界大戦後(1945年以降)に発表された口語体の作品を用いることにする。

7) 「いつも」が形式名詞「こと」とくみあわさると、「いつものことだが」のように肯定形式で現れうるが、この場合の「いつものことだが」は頻度を表す修飾語とはいえない。

・いつものことだが、太郎は待ち合わせに遅れてやってきた。

8) 「偶然」は格の体系を持ち、一般には名詞とみなされるものであるが、ゼロ格で文中に用いられる場合には、副詞に準ずるものとみなせる。

9) 否定形式の使用には、副詞の語彙的な意味だけでなく、文脈も大きく関与すると思われるが、先行文脈に述べられた、修飾語に相当する部分の内容を否定する際でも、各カテゴリーで量や程度が大きいことを表すとみなせる副詞の場合は、ガ・ケレドモを伴って否定形式で現れうるが、量や程度の小さいことを表すものについては、別形式を用いるのが自然だと思われる。仮に量や程度の小さいことを表すものを否定形式で用いた場合には、あとに量や程度のより大きいことを表す語(「相当」など)が示されないと、不自然である。

・A:「昨日、太郎、たくさん飲んでた?」

B:「たくさんじゃないけど、(まあまあ)飲んだよ。」

・A:「太郎、少し(は)飲んだ?」

B:「?少しじゃないけど、飲んでたよ。」

→少しじゃなくて、相当飲んでたよ。

(少しどころか)

なお、今回タイプAとした、成立量・完全性の程度が小さいことを表すタイプの副詞は、通常肯定文で用いられるものであり、(とりたて助辞の「は」を伴ったとしても)否定文では通常用いられないと考えられる。逆に、タイプBの、量や程度が大きいことを表すものは、肯定文でも否定文でも用いられる。ただし、タイプAとは異なり、肯定文においては、「は」によるとりたてが不可能となる。このようなことも、特に様態を表す副詞について、いずれのタイプになるかを判断する助けとなるのではないだろうか。

- ・ { ほんやりと (は) 覚えている。 / *ほんやりと (は) 覚えていない。
はつきりと (*は) 覚えている。 / はつきりと (は) 覚えていない。
- ・ { ゆっくりと (は) 進んでいる。 / ?ゆっくりと (は) 進んでいない。
急速に (*は) 進んでいる。 / 急速に (は) 進んでいない。

10) 例えば、「少し」のように副詞単独であれば、実行を求める命令文や依頼文などでも、述語の示す動きの量的な側面をさしめず修飾語として用いることが可能だが、「少しだが」のようにガ・ケレドモが接続したものは、このような使用はできない。

- ・ 少し食べて。
- ・ 少しだけど、食べて。

上の2例を比較すると、「少し食べて」の場合には、食べることを求められている量が「少し」であることを表す(食べ物自体はたくさんあってもよい)が、「少しだけど食べて」では、そこに差し出されている食べ物自体が「少し」であることが示されており、述語となる動詞「食べる」の修飾語とはみなせない。このことから、「Xダガ」が修飾語として機能できるのは、平叙文に限られると考えられる。

11) 本稿では、<動きの勢い・強さ><動きの早さ>といった側面に注目するという点で、仁田(2002)を参考にはしているが、個々の副詞の側面のとらえ方については、必ずしも仁田(2002)に従うものではない。また、同じ副詞であっても、用いられる文によって、どの側面が前面化するかが変わる可能性もあると考えられる。

12) なお、今回は分析の対象としなかったが、陳述副詞にガ・ケレドモが接続する例もある(独立語となる)。現れる陳述副詞には、当為・義務を表す「当然」が多かった。これらは基本的に肯定形式で現れる。ほかに、「もしも」の例も1例見られた。これは名詞に接続する、「仮の話だが」のような例と連続するものかもしれない。また、不可能を表す「とても」の例が複数見られたが、すべて「とてもじゃないが」と否定の形をとっていた。(これは全体で一語化しつつあるのかもしれない。)

用例出典

〈小説〉※本文中に引用したのもののみを示す。短編集については、文庫本のタイトルを作品名として示している。

石川達三(1977)『独りきりの世界』新潮文庫版(1982)、五木寛之(1971)『青春の門 自立篇 上』講談社文庫版(1973)、角田光代(1998)『夜かかる虹』講談社文庫版(2004)、片岡義男(1992)『最愛の人たち』新潮文庫、北杜夫(1994)『母の影』新潮文庫版(1997)、高樹のぶ子(1990)『霧の子午線』中公文庫版(1995)、高杉良(1983)『生命燃ゆ』新潮文庫版(1998)、辻仁成1996『ニュートンの林檎(上)』集英社文庫版(1999)、西村京太郎(1990)『寝台特急「ゆうづる」の女』文藝春秋、宮本輝(1985)『ド

『ノウの旅人（上）』新潮文庫版, 村上春樹（1985）『羊をめぐる冒険（上）』講談社文庫版, 村山由佳（1991）
『青のフェルマータ』集英社文庫版（2000）, 森瑤子（1988）『砂の家』新潮文庫版（1991）, 渡辺淳一（1974）
『脳は語らず』新潮文庫版（1991）

〈新聞〉※大阪大学文学部日本語学講座設置のデータを使用した。

・CD-ROM版 毎日新聞2006 データ集 本社版 毎日新聞社

主要参考文献

工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院

———（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』
岩波書店

小出慶一（1984）「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ連合日本研究センター紀要』7

才田いずみ・小松紀子・小出慶一（1984）「表現としての注釈—その機能と位置づけ—」『日本語教育』52

齊藤美穂（2007a）「名詞句に接続するガ・ケドの用法」『阪大日本語研究』19 大阪大学大学院文学研究
科日本語学講座

———（2007b）「数量を表す語句に接続するガ・ケドの用法」『待兼山論叢 日本学篇』41 大阪大学
文学会

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

高橋美奈子（1999）「判定詞+接続助詞「が」による主題提示を持つ文について」『日本学報』18

永野賢（1951）『現代語の助詞・助動詞』国立国語研究所報告書3 秀英出版

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版

丹羽哲也（1998）「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究』第50巻第10分冊 大阪市立大学文学部

南不二男（1991）「現代日本語の従属句についての小調査」『日本語学』10-12

———（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

森田良行（1980）『基礎日本語2 意味と使い方』角川書店

（博士後期課程学生）

（2008年8月22日受付）

（2008年10月2日修正版受付）

（2008年10月30日再修正版受付）

（2008年11月12日掲載決定）